

G-5 広島・東京・岩手における家庭内被服製作の実態—昭和47と昭和42の比較—
広島大教育 石渡すみ江, 大東文化大 大山サカエ, 岩手大教育 清水房

前報に引き続き / 年間の自家製作品に用いられている「縫い方」について、昭和47年の調査をもとに昭和42年値と比較しつぎのような結果が得られたので報告する。目的・方法は既報のとおりであるので省略する。

結果 ①洋服類については42年より47年の方が3地域とも多くの技術を用いるようになってきている。特に広島の伸びが著しく東京との差がみられなくなった。②和服類の「手縫いのみ」は、47年には東京を除く2地域で増加している。「ミシン縫い」は42年の調査と同様で僅かである。「あわせ」は岩手で減少し、広島と東京が増加している。「縮入れ」は地域性がはつきりしていて依然岩手でよく行われている。③寝具類:「ふとん側縫い」の縫い方は両調査共「手縫いのみ」が上廻っている。さぶとん側だけ「ミシンで縫われている」ようである。縮入れは42年にくらべ減少している。④小物類の「そうきん縫い」はミシン縫いが両年次共広島に多く見られ、47年は増加している。「ふくろ類」は岩手だけが両調査とも手縫いが上廻っている。「おむつ」は手縫いで40%代つくられている。以上の結果から被服製作技術は洋服類からみると都市化するに従い多くの技術が用いられている。「手縫い」は和服類・寝具類・小物類の製作において両年次とも大差なく行われている。このことから技術の指導にも地域性を考慮する必要があるし、その種類の中を広げたり技術の質的向上をめぐる指導が必要のように思われる。また手縫いの技術指導も我が国の被服生活には捨て切ることができないように思われる。